

あとがき 〈ナシヨナリストの言語〉

「女性」、「在日朝鮮・韓国人」、「障害者」などに対する差別はいつこうになくなりそうもありません。学校では、「人間」みな平等であると繰り返し教えられているにもかかわらず、こうした人たちを軽視したり、罵倒したり、職業選択の自由を制限したりする言論が跡を絶たないからです。「女性」は「男性」以下とみなされ、「在日朝鮮・韓国人」や「中国人」、他のアジア諸国から来た人たちは、いろいろな現場で「日本人」とは同等にあつかわれず、自己決定権は軽んじられています。しかし、たぶん多くの人たちは「差別はよくない」、「相手の立場を尊重しなければならない」と思っているに違いありません。

権力を可視化するための学問

にもかかわらず、差別が厳然として存在するのは、これを肯定する、あるいは引き起こす語彙を、私たちが保持しているからでしょう。たとえば男・女は平等であると主張しつつも、無自覚的に男言葉を使い、「男性」的なふるまいをしています。従って、平等へ向けてとして設計された施策が、実は格差を助長していることを見抜けません。これは差別により割を食う側にいる者にしても、そうではないでしょうか。

たとえこうした矛盾に気づいても、自分は生まれながらの「日本人」だから、「健常者」だから、「男性」だから、としてこれらを自然化しつつ、だからついそうなってしまうと反省するのがやまやまでした。「民族」は生まれながらのものであり、男と女は生物学的にも生理学的にも違うし、「目が見えない」「耳が聴こえない」というのは事実で、これは誰が見ても明らかではないか。だから互いに、それぞれの「文化」を尊重し、あるいはその違いが不利にならないような設備をつくりあげ、「障害者」にはつとめて手を差し伸べる必要がある、としてきました。しかし差別は、いっこうになくなっていません。

これはある意味、差別のメカニズムを、既存の学問が解明できなかったことを示しています。ものごとには実体があつて、これを科学的・実証的・中立的方法で解き明かすことを標榜してきたからでしょう。矛盾の根源はみずからの中にある社会認識の方法にあることは明白であるのに、これを解明できませんでした。対象を実体化し、客観性や中立性をうたう学問は、近代社会の生成とともに出現したものです。それを作りあげ維持することに奉仕してきた学問によって、誕生時に胚胎した陥穽を見抜くことなどできるはずがありません。

漸進的改革を標榜する保守によって、今やこの社会は悪くなるばかりです。現在の権力体制をよしとするものに、矛盾の根源を明らかにすることを期待することなどできません。社会の変革には、従来とは発想を異にする学問が生み出される必要があります。

コペルニクスの転回による新しい「知」は、これまで平等というヴェールに覆い隠され、虐げられ周縁化されてきた側に軸足を置き、この社会を動かしているメカニズムを可視化することによってしか生み出すことはできません。

線を引く

学問や社会で用いられるカテゴリーを作りあげ、これを定義するのは、第一章で述べられているように、言語です。無言の行為があってもそれが何であったかを意味づけるのは、やはり言葉です。たしかに私たちは言葉でしか、物事を考えることができません。皆が同じ言葉でその人のことを表現し、またその人もそれを受け入れてしまい、あるいは受け入れざるを得なくなると、その人（あるいは動物や物）は実体化されてしまいます。たとえ「本質」はそうでないと息巻いても、その言葉がまわりに受け入れられなければただの変わり者になるだけです。

「男性」も「女性」も、「日本人」も「中国人」も、「健常者」も「障害者」も、まずそうであるという本質があり、その結果として、そうと思えるふるまいや、言葉づかいが形成されると考えられました。しかし現実には、言語行為の結果、「男性」になったり、「日本人」になったりします。赤ん坊が、外見はどうであれ、つまりどんな遺伝子を保持しているようにとも、どこで、そして誰の手でどんな言語によって育てられたかで、「人」

となってしまうことからみても、このことは明白です。

言葉は単独で意味を持ちません。例えば私的土地所有といういっけん自分と土地とのあいだの関係を表現したもので、この「私有」という言葉は、他人の存在があつてはじめて意味を持ちます。たとえ法律で定められていても、この言葉の意味が他人に諒解されないと、その土地の排他的所有は実現しません。「私有」の意味を理解し、それを受け入れることがすべての構成員に求められることによって、私有財産制の社会が出来上がるのです。

このように、社会を成り立たせているのは、私たちの外側にある「本質」などではなく、みずからが使用する言葉であると考えざるをえません。第五章で述べられているように、「ヒト」は遺伝子の突然変異によってつくられました。「人間」は言葉を持つことによつて出現し、変化してきました。そして、いろいろな言葉（名前）を使い、形態や習性を参照しつつ、連続して捉えどころのない自然界を次々に分類しています。みずからの内部も「人種」に分けました。そしていったん分割・分類すると、それぞれの中は均一と理解し、あげくの果てには、「種」を保存するために個体が存在するという考え方も生まれ、「種」によつて個を判断するようになります。

世界は「種」を個々の構成要素として成り立ち、その相互関係のもとに動いていると考えられてきました。このとき誰が、どんな意図で「種」の分類をおこなうかで、構成

要素の社会的な位置づけ、すなわち「物事の秩序」が確定されてきたといつてよいでしょう。第二章ではこれが「政治」であると紹介されています。

上下にわけ線

解剖学的には、「どこまでが男でどこまでが女」とすることはできないということです。なのに「人間」を「男性」と「女性」という言葉で二つに分けてしまいました。しかもこの分類は、左右対称になっていません（第一章）。例えば子供を産むか産まないかが大きな違いがあるとして、男・女の線が引かれています。そして労働や仕事の継続などといった観点から、これは序列化されました。ちなみにこの場合も、第四章で指摘されている「国家の集会的利益」を基準にしているからでしょう。

「人間」の分類は、言語を基本としながら、これに風俗・習慣等を加味しておこなわれてきました。従って言語調査や言語学の動向、住民の生活慣行の変化によりこの区分は変化することになります。エーヤーワディー流域に限ったことではありませんが、ある「民族」（人種、部族）として識別されていた人が、次のセンサスでは別の「民族」とされたり、新たに名前を与えられたりと、目まぐるしく変化してきました（第二章）。そして「国家」（政庁）への貢献度に応じて、「文明人」とされたり「野蛮人」とみなされたりもしました。もし「民族」が生まれながらのものであれば、このようなことが起こるはずはありません。

カナダの例でもみられたように、「移民」を、その生活習慣の違いに着目し、みずからとは異なるくくりの中に閉じ込めます（第三章）。ところが、経済的に成功する人がでてくると、「白人」の中には、こうした人たちに違和感をもち、太平洋戦争が勃発すると「日系人」というくくりで、これを排斥しました。「人種」の形成は、その個人がより正確に認定された結果というより、その外側で区分と名称がつくられ、管理や支配の対象としてその中に投げ込まれた結果であるといえます。

「人種」だけではありません。経済的な「自立」を原則とする社会では、これをおこなえない人を「障害者」という言葉で囲みます（第四章）。そして「福祉」なる言葉を編み出し「健常者」が手を差し伸べる対象とします。さらに「障害者」を「自立」が可能であるか、そうでないかで、等級分けをしてきました。「高齢者」も「児童」も「自立」できないことでは変わりありませんが、これと同じにはしません。「高齢者」に対しては、これまで「国家」に貢献してきたのでその補償の、「児童」に対しては「自立」に向けての支援の対象としています。ともあれ、こうした人たちを放置すると社会が不安定になり産業効率が低下し、「国民 (nation)」による「国家」の総生産が低下して、全体の利益が損なわれると考えたからにほかなりません。

「男性」、「女性」、「日本人」、「中国人」、「健常者」、「障害者」などの用語による分類は、左右対称ではなく、「ヒト」が進化の頂点に位置すると考えられていたように、上下の関

係として、これがおこなわれています。「進化」には方向性などなく、それぞれは遺伝子が本来的に有する突然変異と環境の組み合わせで、現状にもっとも都合よい個体が繁栄していると考えられています（第五章）。環境に対応して、突然変異が起こるわけではありません。従って、生物間において、そしておそらく人類社会の間にあっても、どれが進んでいて、どれが遅れている、ということではなく、現状に適応できたか否かの問題でしかありえません。つまり現状——「人間」でいえば社会状況——こそが問題であって、生物個体に要因があるからではないことが分かります。

線は「国家」の都合

そうすると、こうしたカテゴリーや言葉づかいは、いったいどのような作為によるものなのでしょうか。一九世紀以降、地球上に存在する大多数の社会は、「国民」という、平等なものたちの同志的な結合でできあがっていると観念されています。そして一つの社会は空間的に隔離されています。従って「自由」、「平等」、「友愛」といった用語も、国境の中、つまり同じ「国民」にのみに適用され、「外国人」や準構成員が除外されてもあまり問題にされません。これがもっとも先鋭にあらわれるのが戦争や植民地支配で、相手方の戦闘員や現地の人びとの基本的権利を完全に無視しても、本国「国民」の中では問題にされません。むしろそのことによって、我われ意識を強化・結束しようとして

きました。

「国民」を平等に扱い、統合するための政策は言語とこれが生み出す制度、習慣などの一元化を通して進められています。生活様式、規範、風習などの中にある共通性や、こうしたものの理念型を描き出し、これを「文化」という言葉でまとめます。そして、文学、絵画、舞踊、国家儀礼、博物館、モニュメント、遺跡、博覧会、マスメディアなどをつうじて定式化し、「我が国固有の価値」として、誇りの源泉としてきました。

「国民」あるいは「民族」という言葉は、成員に情緒的に関与し、民主主義、社会（共産）主義、フェミニズム、宗教などを超越し、成員にとつて至高のアイデンティティとして感受されてきました。「キリスト教徒」や「仏教徒」、「資本家」や「労働者」、そして「男性」や「女性」より「国民」「民族」という言葉が重視されます。高等教育の普及や社会産業基盤の整備によって、「文化」の定式化はさらに進み、住民の知識やイデオロギーの構造はますます均一化されています。

国民皆兵制度、普通選挙制度、福祉制度の確立などにより、「国民」や「国家」を参照する用語法が浸透していく過程で、政府や社会に対する不満は、言語の違いに着目し、これによってみずからの境界を設定した集団を作りあげていきます。そして多数者にならない、みずからも同一の「文化」を共有していることをもって、そこには根源的紐帯が存在し、同胞としての感情は、生まれる前から決まっていたものと考えられるようになります。

した。こうして一つの支配空間つまり政治空間に、均一化から疎外された少数派が生み出されますが、生きていくためには、多数派が使用する言語体系を受けいれ、みずから主体化せざるをえません。

もちろん少数派は諸権利の保護、社会格差の是正を訴えていきますが、それは実現しません。多数派と少数派とは、国内において同一の資源を争奪する関係になっており、「国家」の発展なしには、少数派の存続もあり得ないと理解されているからです。また多数派は、同一の政治空間内に存在する少数派を参照しつつ自画像を形成し、これをみずからのアイデンティティ形成の拠り所としているため、「国家」の結束のためには、「外国人」、「野蛮人」、「守るべき女性」、「障害者」などの言葉がどうしても必要なのです。

線を引くナシヨナリスト

結局、ここで問題にしている線を引くのは、個人より「国家」や「民族」を大切にする人です。「国家」を動かし、「国民」あつての住民と考える者が、「国家」の都合に合わせて、境目のないところに線を引き、それを上下に配置してきたのです。

男が男になるのは男によってであり、女に「男らしい」といわれても、それほど心がはずみません。逆に女を評価するのは男で、女は男に評価されて女になる（第一章）。これは男が男しか信用していないからであり、「国家」や組織、「会社」の存亡にかかわる

ような仕事を女には任せられないと考えているからでしょう。そうなるのは「権力という資源を握っているのが「男性」集団であるから」で、これが「国家」を動かしていることは明白です。

いったん線が引かれると、これを維持するメカニズムが、「我が国」、「我が民族の文化」、「日本人なら」などという言葉によって作動します。こうした言葉は、「女性」であっても、それこそ自発的にこの線の存在を意識の外に追いやってしまいます。それは男・女といういやおうなしの区分と、前者が圧倒的優位に立つ「国家」にあつては、後者が生きていくためにはこれを受け入れ、利用する以外に方法はないからです。

「人種」にしても同様で、住民を「群」や「種」にまとめるのは、その性格を実体化し、これでもって個々人を直接管理しようという植民地主義的住民支配の発想から生まれたものでした（第二章）。エーヤーワディー流域地方の住民は、はるか昔、何処からか入ってきて、これが枝分かれしていったという理解のもと、言語系統や外見、風俗を参照することによって、分類され、系統図が描かれました。そして植民地政庁による統治（資源配分）は、この分類名を参照することによっておこなわれたため、住民もみずからの宗教や思想・信条・習慣・伝統などを独自の言葉で表現し、他とは異なるとした同胞意識を生成させていったのです。

カナダ政府も、太平洋戦争時、「日本人と日本人の血をひく人」というカテゴリーを設け、

これを強制的に収容所送りとします。カナダ国籍を持つている者であっても「日本人の血を引く人」として、これに含め、財産はすべて没収しました。この段階で、カナダで生まれ、カナダで育ち、カナダの学校に通っており、カナダを自分の故郷であると考えられるようになっていた人たちは、「血縁」という言葉をもって、例外扱いをしませんでした。そして戦争終了後も、カナダ政府は防衛上の要請から前居住地に「日系人」が戻ることは許さず、他の「人種」と結婚する道を強制し、逆にこの区分の希薄化を推進しました（第三章）。

「国家」の都合により、線が引かれるのは、「障害者」も同様です。何をもって「自立」とするかは、歴史的位相によって異なります。労働力を売って、生活の糧を得ることが「自立」とされる社会では、そうしたことができないと社会に対する発言権は封じられます。これは近代資本主義社会の成立とともにできあがった、きわめて歴史的な制度にはかたまりません。誰でも生活の糧が、何らかの方法で得られる社会であれば、意味をなさないからです。

人の助けを受けないことを「正常」とする社会にあつては、「健常者」によって生産がなされ、運営されていると考えられています。従って「障害者」をサポートするのは「健常者」でなければならず、これなくして「障害者」は、生活できないとなるでしょう。こうして、そのための費用が掛かりすぎ、国際競争に負け、「国家」としての集合的利益

がおおきく損なわれるとなると、この負担をできるだけ少なくするため、「標準」が動かされることとなります。そして、医学的判断により等級が定められてきました。

「障害」は、私たちによって認識されたときにはじめて障害となります(第四章)。「国家」や「会社」の要求にこたえられないのは、どこかに問題があるとみされ、それが特定され「障害者」となります。従ってその要求水準によって「障害者」となったり、ならなかったりもします。そういう意味で、絶対的障害者は存在せず、そのときみずからを「健常者」とみなすものが、その線引きをおこなってきました。すべては国のため、「国家」や「会社」あつての個人だからです。

「進化生物学」が教えてくれるのは、どんな生物でも、現在の状況に対応した最先端の姿をしているという考え方でした(第五章)。生物界のなかには、かっちりとした線引きできるといふ「種」というものは明確に存在せず、それは「犬」や「カエル」などの動物に相談することなく「人間」が勝手に分類し整理することによってできあがったものです。そしてみずからが、食物連鎖の頂点にあるという自覚から、形態や習性によって、「霊長類」とか「猛禽類」という名前をつけて、これを序列化したのです。しかし現実には「種」のなかからさまざまな「種」が出てきて、多様化は進んでいるのです。どれが優性でどれが劣性であるかは、誰にもきめることができません。

カテゴリーで人をみない

「国家」や「民族」という言葉を多用する者が、住民を管理し支配するためにつくったカテゴリーを用いて暮らしていると、自分で自分の首を絞めるようなことになってしまします。たとえ自分は差別する側に立っていることに安心したとしても、そうした構造が存在する限り、いつの間にか、自分自身が差別され、不利益を被る側に区分されることになりかねません。

そのためには、「男だから」「日本人なら」とか「健常者」とか、こうした言葉づかい（実践）が存在する理由を把握する必要があります。そして如上の文言が、いかなる経緯によって作りあげられ、何のために用いられているか、といったことをまず考えてみなければなりません。同時に相手を判断するばあい「ベトナム人」、「障害者」、「男性」、「女性」というような言葉やカテゴリーを使わず、まずは一人の「人間」としてみてみる（第一章）。「移民」を積極的に受け入れ、これによって「国家」財政が安定しているカナダは、多文化主義の先進国とされ、国会でも二言語制がとりいれられています。しかしサラダ・ボウル的であるためか、フランス系のケベック州には分離独立運動が依然として存在します。そして、民族差別を認めた政府による謝罪が、「ジャパニーズ・カナディアン・ナショナル・ミュージアム」の建設に結果するのは、依然としてエスニシティが参照されていることを示しているのではないでしょうか。「性別カテゴリーを参照することで、あ

る個人の振る舞いを解釈することが、ジェンダーする」(第一章)のと同様、「国際化のためには日本の「文化」もよく知らなければならぬ」というのも、「民族」カテゴリを再生産することになっていくのです。

言葉の用法を知れば、即こころした思考方法から解放されるとは限りません。そのよって起ころる力の根源が崩れない限り、「網の目のように仕組まれた強制力」が働くからです。まずはこれを可視化するため、自分の中に構築された、「国家」による言葉の体系を相対化する必要があると考えます。何気なく使うカテゴリのネイションの起源を考え、別の言葉で表現するとどうなるのか。「あなた」や「わたし」を、「日本人」とか、「男性」とか「健常者」とか、「サラリーマン」という言葉を使わずに認識しようとしたら、どんな言葉が必要になるのでしょうか。